

## 商業町の祭り研究における分析視角の検討

### —祭りの背後にある生業と生活の分析の重要性—

深澤 あかね

本稿では、商業町の祭り研究の分析視角を検討する。商家の人々の祭りは、商業経営と家族生活から成る日々の暮らしの断面図と捉えうる。

祭りと地域社会の関係性については、従来、民俗学・人類学・社会学的な調査研究が行われ、祭りの「伝統性」だけでなく、変化面への着目もなされてきた。中には、祭りに「地域コミュニティの再生」や「アイデンティティの確認」等の機能を見出そうとする姿勢が見られ、それに対し、祭りが本来的に孕む緊張関係への配慮が足りない指摘する声もある。「家」を営む人々の祭りを対象とする際は、祭りの背後にある人々の生業と生活の複合性を見通す分析が必要である。

近年は、「選択縁」で結ばれた新しい祭り集団が増加している。だが他方で「血縁」「地縁」が弛緩した社会の弱点を指摘する動きもある中、「伝統的」な祭りを歴史的に分析しながら、その現代の形を捉えることは、今後の地域社会のあり方を模索する一助となりうる。

**キーワード：祭り、地域社会、緊張関係、家、生業と生活**

### 1. はじめに

本稿では先行研究の整理を通して、商業町の祭りを研究する上での分析視角を検討する。

商業町は、代々に渡って商業経営と家族生活の両方を営む、商家によって形成されてきた。「家」とは、過去にそれを支えてきた家祖を祀りながら、代々受け継がれる家産を用いて、成員の生活を保障するための家業・家事を営む集団と規定される(中野 1964:767)。そのような「家」を営む人々にとって祭りは、商業経営と家族生活から成る日々の暮らしの断面図として存在してきたと言える。

従来、祭りを地域社会との関係性の中で把握しようとする研究は、主に民俗学や人類学、社会学の分野で行われ、「伝統的」な祭りの詳細なフィールドワークが蓄積されてきた。伝統を繋いでゆく人々の営みに着目し、それを書き留めてゆくことに重きを置いた当初の研究は、反面、祭りの変容を捉える視点に乏しかったが、やがて、「伝統性」の偏重を反省し、それを補う分析視角を持つ研究も現れてきた<sup>1</sup>。

ただし、これらの研究の中には、祭りに「地域コミュニティの再生」や「アイデンティティの確認」

といった機能を見出そうとする姿勢も見られる<sup>ii</sup>。そのような潮流に対し、祭りが本来的に孕む緊張関係への配慮が足りない「予定調和論的」な機能論である、と批難する声もある<sup>iii</sup>。祭りをどのような切り口で分析するのかという点には、個々の研究者による、地域社会の捉え方が大きく影響すると言えよう。

商業町の祭りを分析対象とする本研究では、「家」に着目し人々の家業経営と家族生活の両面を分析対象としてきた、農村社会学の視角を援用している。この分析視角に則り、「家」を営む人々の目線に立って見れば、生活と生業は本来、切り離して考えることのできないものであり、またそのような暮らしを行う場として地域社会が存在してきたと言える。このような人々にとって、祭りとは何か、ということを実態に即して多面的に捉えるためには、彼らが地域社会の中で営んできた、生業と生活の両面に光を当てることが重要である。

他方、近年は、よさこい祭りの事例に代表されるように、「選択縁」で結ばれた集団による祭り参加が増加しており、そのような新しい祭りのあり方に着目した研究も、数多く行われている<sup>iv</sup>。「選択縁」は、人々の生業と生活の分離が進み、「血縁」や「地縁」が弛緩してゆく中で、発達してきた。このような「選択縁」に着目した祭り研究は、現代社会の祭りを「選べない縁」に基づいた概念で把握することは不可能である、との前提に立っている。また一方では、今日、地域社会においては、「血縁」や「地縁」が弛緩したことによる弊害が表面化してきているとの指摘もある。だが、実態として、「血縁」「地縁」は、一方的に廃れてきたのだろうか。そのような問題意識から、現在も「血縁」「地縁」による人々の関係性が残っていると思われる地域に焦点をあて、そこで行われてきた「伝統的」な祭りを歴史的に分析し、今日の祭りの形を捉え、今後の地域社会のあり方を探ってゆくことも、重要な研究課題であると言えよう。

本稿では、祭りと地域社会の関係性を視野に入れている先行研究の整理を行い、商業町の祭りを研究する上での分析視角を検討する。そして、現象としての祭りの変化への着目に留まらず、それを掘り下げ、生業と生活が分離されていない状態である人々の暮らしや、暮らしの場としての地域社会の構造の分析につなげてゆく必要性を指摘する。

## 2. 地域社会と祭りの関係性への着目

日本の祭り研究は、古くは民俗学や宗教学の分野で行われてきた。祭りを催行する人々への着目は、宮座や講集団等の研究として表れていた。その後、民俗学や人類学、社会学などの分野で、祭りを地域社会との関係性の中で把握しようとする、実証的な研究が行われるようになる。その初期の研究としては、都市人類学者の中村孚美や米山俊直の研究が挙げられよう。

中村は、埼玉県の川越祭りや秩父まつりを事例として取り上げ、祭りの準備から当日、屋台の解体に至るまでの、参加者たちの動きを調査した。そして、祭りの参加集団における地位や役割を明らかにするとともに、通過儀礼としての意味合いなど、人々にとっての祭りの存在意義を描き出した(中村 1972a, 1972b)。米山は、山鉾町を単位とする町組が主体となる祇園祭と、同業者団体による講社組織が催行する天神祭を調査し、それぞれの祭りを支えている社会集団の分析を試みた

(米山 1974, 1979)。中村や米山の研究に対し、都市人類学による祭り研究の系譜を受け継いだ和崎春日は、「町内会に支えられた都市の地域社会と、祭礼の構造との関係成立のメカニズムや、その協力のシステム」を明らかにしたと評している(和崎 1976:4)。

このような「伝統的」な祭りを対象とした初期のフィールドワークは、伝統を繋いでゆく人々の営みに着目し、それを書き留めてゆくことに重きを置いていた。その反面、祭りの変容とそれへの人々の対応を捉える視点に欠けていたことは否めない。そして、次の段階として、祭りの変化に着目した研究が見られるようになった。

前述のように、祇園祭や天神祭の調査を行った米山は、血縁・地縁社会から社縁社会への移行を指摘した(米山 1999)。血縁が重要であった採集狩猟生活から、農業牧畜の開始による定住生活、さらに都市の誕生による地縁集団の重要化、そして産業革命を経て社縁中心の社会への移行。血縁・地縁の減退と社縁の卓越の背後には、「生産・所得獲得の場所と消費する家族」との分離があった、と米山は指摘する(米山 1999:14)。そして米山は、地域が「ある意味で個人を拘束し、その行動を制限する」面を持ち、「それを逃れるために、人びとは故郷を捨てて都市に向かい、都市の自由な空気をもとめてきたという面のある」ことを踏まえた上で、あらためて、経済の成長期が終わった今日、地縁の再評価をするべきであると述べている(米山 1999:16)。

また、森田三郎は、「長崎くんち」のフィールドワークを報告した(森田 1980)。この祭りは、政治的な起源を持ち、観光祭りとしての性格を色濃く持ちながらも、都市内の近隣生活集団を祭りの基礎単位としてきた。森田は、この祭りが、氏子神社の神事でありながら、実質的には「社会的慣習の尊重」や「近隣社会の人間関係の確認のための儀式」であったとみなす。そして、祭りを催行する「伝統的近隣社会そのものが崩壊の危機を迎えつつある」ことを指摘し、近隣社会の再建の必要性に言及した(森田 1980:113)。

### 3. 祭りが孕む緊張関係の指摘

前項で取り上げたように、地域社会における祭りの実態を捉えようとする研究分野では、詳細なフィールドワークが蓄積されてきた。その中には、祭りに「地域コミュニティの再生」や「アイデンティティの確認」等の機能を見出そうとする研究も見られることとなった。

米山は、「祭礼は元来は宗教行事であり、神事であった」とし、「滔々たる世俗化、商業化の流れがあるとはいえ、参加者の心意はそれを超えた献身の意気があり、それが膨大な出費と労力をともなう祭礼行事を可能にしている」(米山 1999:18)と指摘した。そして、「こころの時代、ふれあいの時代という人間性回復が試行されている現在、近隣集団の機能を高め、わが町、わがむらに対する愛着を育てることが大切」として、地縁再生装置としての都市の祭礼に注目すべきと述べている(米山 1999:23)。

また森田は、『祭りの文化人類学』(森田 1990)において、「『人間は象徴を規則正しく使用する祭りを利用することによって自己のアイデンティティを確認する』ということ提案したい」(森田 1990:142)と述べ、「自他の位置が、祭りにおいては、たとえば同じ氏子として神の前での基本的

平等という関係を媒介として、参加者全員の体験をとおして承認される。そのことをとおして地域の住人としての資格、地位を再確認でき、心理的安定をえられるのである」と指摘している（森田 1990:169）。

だが他方で、このように祭りの存在意義を今日的な観点から積極的に評価しようとする潮流に対し、本来祭りが孕んでいる緊張関係への配慮が足りない「予定調和主義的な機能論」である、と批難する声もある。

長い間、統制により開催が翻弄されてきた熊本の「ボシタまつり」を研究対象とする、社会学者の芦田徹郎は、「近年の各分野での祭り研究のなかに、地域社会の再生、アイデンティティの確認、人間性の回復、あらたな共同性や関係性の構築、等々を強調する予定調和論的な偏りがみられる傾向に、いささか懸念を覚えている。祭りが『内部』を結束させ、成員に生きる意味と力を付与するとはいっても、その背後には『外部』に対する様々な差別、排除、抑圧、暴力、犠牲等が張り付いていたのであり、今日でもそれが顕在化することは珍しくない」と指摘した（芦田 1999:100）。

米山や森田らの研究は、芦田が指摘するような祭りの緊張関係にはあえて着目せず、地縁が緩い地域における祭りの今日的な存在意義を強調する立場をとっていると言えよう。今日の地域社会においては、職住分離が進んだことによって、多くの人々の暮らしの中で、生業と生活は切り離されている。「地域コミュニティの再生」や「アイデンティティの確立」といった課題は、人々の生活面から生成するものである。それに対し、芦田が指摘した、祭りが孕む緊張関係とは、これまでの時代においては、主に人々の生業部分に由来するものであった。

社会全体として、雇用労働者家族が増加し、「家」ではなく「家族」生活を対象とする研究が盛んとなってきたことは確かである。雇用労働者家族の人々にとっては、生活の糧を得るための生業の場と、種の再生産を営む生活の場とは、別々のものとなっている。しかし、本研究の分析対象である「家」を営む人々にとって、生業と生活は、元来、切り離して考えることのできないものであり、そのような暮らしを行う場として地域社会が存在してきた。このような商家の人々にとって祭りとは何か、ということを実態に即し多面的に捉えるためには、彼らが地域社会の中で営んできた、生業と生活の両面に光を当て、その暮らしの複合的な性格を分析することが重要となる。

では、芦田が言うような、祭りが孕む差別や排除とは、具体的にどのようなものか。

人類学者の竹沢尚一郎は、「都市祭礼とは、周辺地域から人的資源を（恐らく物的資源も）かき集め、それを支配するための一装置だったのではないか」（竹沢 1999:81）と問題提起する。博多祇園山笠の調査報告の中で、竹沢は、「祭りとは、地域社会が自己の存続と拡張のために、固有の資源としての人的資源を最大限に動員させるための装置なのであり、親和や共同性の感覚の提供と引き換えに、参加者の能力を地域社会に捧げさせることで、周囲の町村にたいして自己の優越性を示すことができた」（竹沢 1998:38）と述べた。そして、「祭りと地域社会とのあいだのこうした関係性を、地域社会の成員がもつであろうアイデンティティの語に結びつけるとすれば、あまりに単純であろう。祭りのもたらす親和は、祭りが可能にした支配と表裏一体の関係にあったのであり、しかもその支配は何重にも絡んだ複雑な関係性をもっていた」（竹沢 1998:38）と指摘し、次のような

具体例を挙げている。

- ・年齢階梯制(年長者を最上位に置く明確な階層性と、年長者だけに許された名誉)
- ・町内間の階層(祭りを出す町と加勢する町との格差)
- ・町内における階層(祭り資金の積み立てに加わることのできない貧者の存在)
- ・男女の差(祭りからの女性の排除)

また、塩月亮子も、芦田と同様、世の動きに翻弄されてきた祭りを調査対象に選んでいる(塩月 2000)。沖縄那覇の遊郭で、遊女たちが着飾って町を練り歩く「尾類馬行列」は、少なくとも100年以上の歴史を持つが、その間、公娼制度問題や、アメリカの統治下での娼婦廃止の軍布令、本土復帰後の婦人団体による批判等の影響で、遊女にまつわる祭りとして非難を受け、たびたび中止にも追い込まれてきたという(塩月 2000)。

戦後の、祭りの復活と中止をめぐる言説の分析を踏まえ、塩月は、「復活派の『尾類馬行列挙行は観光振興・伝統保存・市民の融合・地域活性化に繋がる』という主張には、市民や地域を重視するというモダンの発想と、自分たちのアイデンティティを表すものとして伝統行事を観光というかたちで復活し、保存継承していくというポストモダンの発想の両方がそのなかにあることがわかってくる。一方中止派においては、『祭りの存続は公娼制度の復活となる』というきわめてモダンの発想がその発言の基底にあることがうかがえる。このような中止派の発想は、実はフーコーが批判した近代における性の特権化、すなわち性だけが特殊化されて人格と結びつけられるという考えに陥っているととれる」(塩月 2000: 122-123)と指摘している。

他方、都市人類学による祭り研究の系譜を受け継いだ和崎春日は、京都の盆の仏教行事である左大文字送火を事例に取り上げ、祭礼に関わる社会集団を分析することで、都市社会において祭礼がもつ意味を探った(和崎 1976)。和崎は、祭礼参加者の中でも、役割分担上、参加度が最も高い地域集団を内部構造(「土着集団」)と捉え、そこから同心円的に、町、地域社会、都市社会を見通すことを試みている。その結果、従来ほぼ独占的に祭礼に従事し、閉鎖性・自己完結性を保ってきた「土着集団」は、都市周辺部の市街地化・宅地化に伴い土地売却を迫られ、都市勤労者化するとともに、地域の混住化により、祭礼集団の開放を迫られたことが指摘された。しかし彼らは、自らのアイデンティティ保持のために「シンルイ」という祭りへの参加基準を設け、同時にこの言葉の柔軟性を利用した「狡猾な」方法で人手不足に対応していると、和崎は分析した(和崎 1976)。

和崎の研究は、この点までは非常に興味深いものである。だが、「家」や「村」を分析対象としてきた農村社会学的な観点から見ると、分析が途中で終わっているような感が否めない。それは、土着集団が、本来どのような人々であるのか、彼らが祭礼の催行を担うようになったのには、どのような経緯があったのか、といった点が説明されていないことで、彼らがなぜそこまでして祭礼の催行にこだわるのかが、見えてこないからである。「アイデンティティ保持のため」とされているが、そのアイデンティティは、元来、何から構成されたものなのかという説明を、和崎は行っていない。

もしくは、和崎が、「かつては土着集団における『家』や家系やシンルイ構造が祭りを支えていたが、今や逆に祭りによってかろうじて『家』概念が生き続け、機能し、土着家系が立証されている」(和

崎 1976:19)と述べている点が、この問題に関わってくるのだろうか。つまり、この指摘は、「今や祭りによってかろうじて機能している『家』に、着眼点を置く研究ではない」という宣言として受け取るべきなのだろうか。

また、祭り団体の「対抗関係」に着目した柳川啓一(1987)の研究や、谷部真吾(2000)や安藤直子(2002)らの研究についても、同様の感想を抱く。これらは、祭りの参加団体間に見られる緊張関係を分析した点で重要な研究であるが、祭りの催行において団体同士が対抗関係にあると理解した上で、それぞれ日常生活においてはどのような関係にあるのか、その要素がどのように絡んで祭礼時の対抗に至っているのか、という点の解明がなされていないことが気に掛かる。和崎(1976)をはじめとしたこれらの研究においては、「祭り」という文化が社会の中で持つ意味合い自体に、関心が寄せられているとも言えよう。

それに対し、本稿での祭り研究の目的は、それぞれの時代の中で、祭りにはどのような地域社会のあり方が反映されているのか、祭りの変化、祭りの意味合いの変化の背景には、どのような社会構造の変動があるのか、という点を明らかにすることにある。「家」を営み続けてきた人々が主となって催行する祭りにおいては、彼らの生業と生活の両面に光を当てるといふ分析視角を持つことで、背後にある地域社会のあり方が明らかとなり、人々にとって祭りとは何かということが見えてくると言える。また今日の祭りが、人々の生業や生活、「家」や地域社会のあり方との関連性を持たないものとなっており、祭り研究の際にそれらの要素を分析することが無意味化しているとすれば、そのような変化の背後にある社会構造の変動に、着目する必要があると考えられる。

#### 4. 隆盛する「選択縁」集団への関心

近年は、よさこい祭りに代表されるように、「選択縁」で結ばれた祭り集団が増加しており、そのような新しい祭りのあり方に着目した研究も、数多く行われている。

祭り研究において、地域社会の変化に伴って増加した「選択縁」に着目すべきことを提唱したのは、上野千鶴子(1984)である。上野は、血縁、地縁、社縁を「選べない縁」としてひと括りにし、それと対比される概念として、「選べる縁」を提唱した(上野 1984)。「選択縁」は、拘束性がない社会関係である代わりに、「選択縁的な共同性は、断片性と部分性を免れることはできず、自らの至高性を他の共同性に対して主張することができない」(上野 1984:78)という性質を持つ。また、「拘束的な伝統社会の中にも、選択縁の契機は存在」し、逆に、「選べる関係」へと変質している地縁を、祭りといった媒体を通して「選べない関係」へと転化させることで、安定を図ることもありうる(上野 1984:63)。上野は、このようなものとして「選択縁」を考えている。

具体的な実証研究の中で、祭りに見られる「選択縁」の分析を深めたのは、松平誠(1990)であった。社会学の立場から都市祝祭の変遷を論じた松平は、「選べる縁」に基づく祭り集団を、「地縁」集団や「社縁」集団の「対抗文化」と位置付け、社会構造の変化に伴い必然的に誕生したものとみなした。松平は現代を「社会解体期」とみなし、産業化の進行で近世都市の生活協同が形骸化した現代都市においては、「不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、さまざまな縁につながって一時的に

結びつき、個人が『合』して『衆』をなし、あるいは『党』『連』『講』などを形成してつくりだす」祝祭が誕生しているとし、それを「合衆型」祝祭と名付けた(松平 1990:2)。

このような「選択縁」による祭りの代表として、近年各地に伝播し様々な地域で開催されるようになった「よさこい祭り」が挙げられる。「よさこい祭り」は、元は昭和29年に高知で創始された祭りであり、その高知での催行については内田忠賢が調査を行ってきた<sup>v</sup>。

商工会議所が主導するこの祭りには、①地縁的性格を持つ「商店街・町内会」、②社縁を基礎とする「企業・学校等」、③日常的なつながりが比較的弱い県人会やよさこい祭りのためだけ一時的に組織された踊りの同好会、の3種類の団体(踊り子隊)が参加しているが、③の団体が急激に増え、1998年には参加団体123チーム中、64団体を占めるまでに至っている(内田 1999:37)。このような点確かめた上で内田は、③の団体のほとんどの構成員が、年ごとに「一般募集」で集められた人であること、また彼らの多くが年々団体を移動するため、団体内の流動性が高い状態であることを指摘し、よさこい祭りにおける各踊り子集団は上野千鶴子の言う「選択縁」的な集団であると結論付けた(内田 1999:38)。

一方、有末賢(1983)は、「選択縁」を採用することで祭りの継続が図られている「伝統的」な祭りの事例として、東京都中央区佃・月島の住吉神社祭礼の調査を行っている(有末 1983)。有末は、人口減少と空洞化の影響を受けた佃島(「内部」)において、特定の区域の居住者および出身者に限られていた祭礼参加の枠が取り払われ、地縁関係のない祭り参加者が現れたことを指摘した。そして、祭礼が内部と外部から成る重層的構造を持つと述べ、「このようなさまざまな変化は、見方によれば伝統の解体と思われるが、内部及び外部社会の変化に組織の枠組みを対応させていく適応力として積極的に見ていく必要がある」(有末 1983:54)と述べている。また結論として、祭りが、内部と外部という重層的構造の一断面を表すと同時に、内部と外部を区別しながらも一体感を与える場所となっていることを指摘した(有末 1983:60)。

同じく、「伝統的」な祭りの中に生成する「選択縁」に着目した事例として、北村敏(1989)と中野紀和(1996)の研究が挙げられる。

北村(1989)は、東京都の調布市と大田区において神社祭礼の調査を行った。北村は、かつて町内の役割分担により滞りなく催行されていた祭礼が、昭和30年代半ば以降、青年団活動の停滞に伴い衰退の方向に向かったこと、また近年では、みこし愛好会の隆盛によって復活していることを説明し、その愛好会の動向について考察している。そして、愛好会が会の本拠地に近い神社や町内の祭りに積極的に協力し、そこの神輿渡御を仕切る権限を得ることによって、愛好会は「自前の祭りと神輿」を持つことができると同時に、神社や町内側にとっても人手が足りず飾るだけとなっていた神輿の渡御が可能となることを指摘した(北村 1989)。

また中野は、都市人類学の立場から、北九州市に伝わる小倉祇園太鼓の叩き手集団の調査を行った(中野 1996)。そこで、個人のつながりが限定されない流動的な集団にも焦点をあてることの重要性を説き、町内会や企業を基盤とした祭り集団に加えて、増加傾向にある、広範囲から集まる「有志」で結成されたチームについて考察した。そして、高度経済成長に伴う住民減少によって、町内住

民に支えられていた祭りが大きな転換期を迎え、従来の町内の参加が減り、企業や、より広い地域の人を取り込んだ有志チームが大部分を占める祭りへと、移行していると指摘した(中野 1996)。

その中野は、次のように述べている。「戦後の半世紀は日本全体が大きな変化を遂げた時代であり、それに連動して、都市であれ農村であれ、祭りのあり方は揺れ動いてきた。時代と共に祭りも推移する以上、変化を伴うのは仕方がない。その背後には、常に祭りをおこなう生活者の意識が見え隠れしている」(中野 2000:80)。

このように、「選択縁」の祭りは、地域社会のあり方の変容をありありと映し出す存在として、全国各地で増加している。「選択縁」は、人々の暮らしにおける生業と生活の分離が進み、地域社会において「血縁」や「地縁」が弛緩してゆく中で発展してきた。そのような「選択縁」を基に祭りに参加する人々にとって、祭りは、生業(仕事)とは切り離された生活面における営みの一環として、『『自己充足的な価値』を追求して『楽しむ』ため』(松平 1990:345)に存在していると指摘される。

## 5. 祭りの背後にある人々の生業と生活への着目

「選択縁」に着目した祭り研究は、「選べない縁」を中心とした概念で現代の祭りを把握することは不可能である、との前提に立っている。だが実態として、従来「血縁」「地縁」によるつながりを主としてきた農村や商業町では、祭りはどのような変遷をたどっているのだろうか。

### 5.1 農村に見る生業と生活の変化と、祭りの関係

農村社会学の研究分野には、農村における祭りの変化と生業の変化を関連付けて論じた研究が、いくつか見られる。

岩手県の農村地帯の調査を行った新保満(1983)は、高度経済成長に伴う生業面での変化の影響で、祭りが従来通りの催行に困難を来し、衰退に向かっていると論じた。農家の兼業化が進み、集落内の人々の「社会的精神的連携」が断ち切られたことによって、共同行事としての祭りが衰退していると、新保は分析している(新保 1983)。

それに対し、生業の変化は必ずしも祭りの衰退を伴わないとの立場がある。松永和人(1981)や白川千尋(1995)は、高度経済成長による生業面の変化に際しても、祭りが存続している例を示し、人々の生業面における変化と祭りの変化の仕方や速さが、単純な対応関係にあるわけではないと分析した。

松永(1981)は、農業生産構造が変化し、従来の米・麦栽培から花卉の栽培へと村全体が移行した福岡県八海市近郊の農村において、麦作に関連した氏神祭祀が存続している例を挙げ、生業の変化が一概に祭りを変質させるとは限らないことを立証した。また、同地域では外来の非農業経営者の急激な増加にも関わらず、在来者との間に「コンフリクト」が起こっていないことにも言及し、氏神祭祀の存続を可能ならしめているのは「農・『非農』、在来者・外来者をともに含む『共同生活』の社会的基盤」であるとの結論を導き出している(松永 1981:272)。

白川(1995)は、かつて農業が主産業であった集落の祭りを調査し、祭りをめぐる状況の変化に対する、担い手個々人の対応を探った。そして、生業の変化に伴い祭りの改編を望む者も出てきては



いるが、集落内の諸事情により、祭りの改編を集落内の公式の場で論じる段階には至っておらず、「膠着状態」が生まれていると結論付けた(白川 1995)。そして、このような生業面の変化と祭の変化の不一致が起こる理由として、両者をつなぐところに「単数ではない複数の人々同士の関係が大きく介在している」ためと述べている(白川 1995:161)。

白川や松永の研究は、祭りの変化を論じる際、担い手個々人の属性のみではなく、集団内における個人の考えや他者との関係に着目し、「変化」と呼ばれるものの様々な側面を捉えることの必要性を説くものといえる。

## 5.2 商業町における祭りの変化

商業町における祭りを調査対象とし、祭りにたずさわる人々の生業と生活にまで言及した研究としては、松平誠(1990)や阿久津昌三(1999)の研究が挙げられる。

松平は、「選沢縁」の祭りへの変遷について理論化した著書の前半で、「伝統的」な都市祝祭として秩父と府中の祭りを取り上げ、豊富な資料に基づいた社会学的な調査分析を詳細に行っている。秩父の祭りを分析した章では、祭りを担う町内における、大正期以降の歳出決算や、町内会費の内訳、主な土地所有者、町内の役員、祭りの際の役員の属性、囃子手の属性などについて、変遷を追う形で資料が用いられている。松平は、日本の伝統的都市結合の一般的な形態を「町内(まちうち)」(松平 1990:128)と呼び、そこでは、「本町民」層の戸主と後継者の集団によって生活共同が形成され、「基本的に排他的・閉鎖的性格をもつ強固な求心性、凝集性」が存在したと指摘する(松平 1990:4)。そしてそのような伝統的都市においては、「神社祭礼に依拠して生活共同の認知がはかられ」、「祭礼費を決める『等級制』に明示される身分階層制、祭礼役職の基準となる『筆順』にもとづく集団の組織編成によって示される威信構造が、神社祭礼のつど氏子集団のなかで強化・再編成され、それがそのまま町内の社会構成原理としてはたらいっていた」(松平 1990:4)と述べた。その上で松平は、府中の祭りを事例に「共同の社会的変化」の過程を分析・説明し(松平 1990:222-224)、結果として「町内の伝統社会は、敗戦の時期から高度経済成長の段階までを契機として、完全に空洞化し、「かつての祝祭の核を形成していた街と祭の集団の実態は雲散霧消してしまっている」と結論付けている(松平 1988)。

また阿久津は、明治以降における長野市祇園祭の変遷から、「祭りの諸相—親和と支配の相」(阿久津 1999:168)を探った。そして、祭りの主体が、「江戸期の町内をはじめとする旦那衆の町内から、新興商人層の町内や盛り場、繁華街を中心とする町内を経て、商店街、官庁街等を中心とする町内へと変化していった」ことを指摘した(阿久津 1999:169-170)。戦後長野市では、祭賑わいの部分が祭事から分離し、以後、行政主導型の夏祭りと祇園祭がそれぞれ独立して行われるようになった。地縁や社縁から成る夏祭りの参加団体は年々変化し、「町内」集団は次々と離脱する結果となっていると、阿久津は指摘している。そして結論として、「明治以降の日本の近代化のなかで、祭りは、都市と農村との関係のみならず、地域社会の人間関係、『縁』の変化とともに変容してきた」と述べ、具体的には「『地縁』の原理の崩壊」「年齢集団という集団帰属の変化」「排除された女性という階層

の参加」といった傾向が見られると指摘した(阿久津 1999:173)。

このように松平や阿久津は、商業町における祭りの歴史の変容を、社会構造の変動と結びつけて分析した上で、いわゆる「近代化」の過程で、旧来「伝統的」都市に見られた祭りの構造は失なわれたという主旨の結論を導き出している。

だが、実際にはそう断言できるだろうか。祭りには今でも、米山や森田が指摘した地縁維持機能や、芦田や竹沢が指摘した、差別や階層が存在している。筆者が1999年から調査を行っている地方都市の祭りにおいては、山車を出している町内会では、現在でも祭りが町内や商店街という単位の求心力として働いている。そして他方では、階層・差別性も認められる。祭り前には、寄付帳をたずさえた役員が順番に基づき各家々をまわり、相応の寄付を依頼している。また、不況の影響で町内の商店からの寄付額が減るとともに、町内人口の減少で人手も不足する中、他の町内会との連合が模索されているが、町内の年配者は、「祭りを出せない町内になってはいけない」と、古い町内としてのこだわりを見せるのである。

これは、松平の観点からすると、「伝統的共同の観念化」(松平 1990:226)とみなされる事象であろう。そして確かに、「選べない縁」の不自由さから脱し「選択縁」の祭りに向かう世の大きな流れはあると言える。だが、日本社会に多少なりとも農村や商業町が存在し、そこで行われる祭りが残っている以上、「伝統的祝祭」は存続しており、その後を見届ける必要もあるのではないか。そしてまた今日、地域社会においては、「血縁」や「地縁」が薄れてきた結果として、「無縁社会」化と呼ばれるような課題が表面化しているとの指摘もある。そのような中、「伝統的」な祭りの現在の姿に着目することは、今後の地域社会のあり方を問うことにもつながると考えられる。

## 6. おわりに

本稿では、祭りと地域社会の関係性を視野に入れている先行研究の整理を行い、商業町の祭りを研究する上での分析視角を検討してきた。

従来祭り研究の中には、「地域コミュニティの再生」や「アイデンティティの確認」といった機能を祭りに見出そうとする姿勢や、それを「予定調和論的」な機能論であると批難し、祭りが本来的に孕む緊張関係への着目の必要性を説く姿勢が、対照的に存在していた。両者の間には、今日の地域社会を生活の場と見るのか、もしくは生業と生活を兼ねてきたことによる階層性の残る場と見るのかという、個々の研究者による地域社会の捉え方の違いがあると言えよう。商業町の祭りを調査対象とする本研究では、祭りの背後にある、人々の生業と生活の両面を見、「伝統的」祭りを多面的に問うてゆく必要がある。

他方、近年増加する「選択縁」に着目した祭り研究は、「選べない縁」を中心とした概念で現代の祭りを把握することは不可能である、との前提に立っていた。そこには、人々を拘束してきた「選べない縁」は、社会の「近代化」とともに衰退してゆくものであるという価値判断が込められているようにも見受けられる。またその一方で、今日の地域社会では、「血縁」や「地縁」が弛緩したことによる弊害が表面化してきているとの指摘もなされている。そのような中、廃れゆくことされる「選べな

い縁」にあえて着目し、それらが実態としてどのように変遷してきたかを分析する研究には、それなりの意義があるのではないだろうか。

もちろん、「選択縁」の社会から「選択できない縁」の社会への逆戻りを指向することは、単なる懐古主義で終わってしまう<sup>vi</sup>。「予定調和論的」な機能論との批評を受けないためにも、「伝統的」な祭りが持っていた多面的な性格に着目しながら、これからの地域社会に活かされてゆく可能性のある部分を、探つてゆく必要がある。そのためには、「血縁」「地縁」により成り立ってきた「家」社会について、人々の生業と生活の両面に光を当てて、その変化も含めて見てゆくことが重要である。

## 【引用文献】

- 久津昌三「第8章 都市空間と祭祀空間—祭りの都市社会学にむけて—」藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』, 有斐閣, 157-175, 1999.
- 安藤直子「地方都市における観光化に伴う『祭礼群』の再編成—盛岡市の六つの祭礼の位置付けをめぐる葛藤とその解消—」『日本民俗学』231, 1-31, 2002.
- 有末賢「都市祭礼の重層的構造—佃・月島の祭祀組織の事例研究—」『社会学評論』32, 37-62, 1983.
- 芦田徹郎「現代都市祭礼のアイロニー—祭りの不可避性と不可能性をめぐって—」『宗教と社会』別冊1998年ワークショップ報告書, 99-106, 1999.
- 北村敏「東京近郊の神社と祭り—調布市を事例として—」岩本通弥他編『都市民俗学へのいざない I 混沌と生成』, 雄山閣出版, 175-204, 1989.
- 松平誠「現代都市祝祭の構成—高円寺阿波おどり—」『季刊人類学』19(2), 149-239, 1988.
- 松平誠『都市祝祭の社会学』, 有斐閣, 1990.
- 松永和人「福岡県八女市近郊農村の変化過程—経済構造, 社会組織, 氏神祭祀を中心として—」『民族学研究』46(3), 249-274, 1981.
- 森田三郎「長崎くんち考—都市祭礼の社会的機能について—」『季刊人類学』11(1), 77-115, 1980.
- 森田三郎『祭りの文化人類学』, 世界思想社, 1990.
- 中村孚美「都市と祭り—川越祭りをめぐって—」『現代書民族の宗教と文化』, 社会思想社, 353-384, 1972a.
- 中村孚美「秩父まつり—都市の祭りの社会人類学—」『季刊人類学』3(4), 149-190, 1972b.
- 中野紀和「都市祭礼における流動層—小倉祇園太鼓を事例として—」『日本民俗学』205, 31-69, 1996.
- 中野紀和「視線の力—都市祭礼・小倉祇園太鼓からみた新たな紐帯—」日本生活学会編『生活学第二十四冊 祝祭の一〇〇年』, ドメス出版, 79-101, 2000.
- 中野卓『商家同族団の研究 —暖簾をめぐる家研究—』, 未来社, 1964.
- 新保満『村が栄える条件—岩手県志和の変貌』, 日本放送出版協会, 1983.
- 塩月亮子「沖縄における尾類馬行列の歴史社会学的考察」日本生活学会編『生活学第二十四冊 祝祭の一〇〇年』, ドメス出版, 102-128, 2000.
- 白川千尋「祭りの推移と『膠着状態』—茨城県南部一集落の祭を事例として—」『日本民俗学』203, 143-164, 1995.
- 竹沢尚一郎「博多祇園山笠」『季刊民族学』84, 3-45, 1998.
- 竹沢尚一郎「都市祭礼研究の課題と可能性」『宗教と社会』別冊1998年ワークショップ報告書, 81-82, 1999.
- 内田忠賢「都市の新しい祭りと民俗学—高知「よさこい祭り」を手掛かりに—」『日本民俗学』220, 33-42, 1999.

上野千鶴子「第2章 祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』, 46-78, 1984.

和崎春日「都市の祭礼の社会人類学—左大文字をめぐる—」『民族学研究』41 (1), 1-29, 1976.

谷部真吾「祭りにおける対抗関係の意味—遠州森町『森の祭り』の事例を通して—」『日本民俗学』222, 64-94, 2000.

柳川啓一『祭りと儀礼の宗教学』, 筑摩書房, 1987.

米山俊直『祇園祭—都市人類学ことはじめ—』, 中央公論社, 1974.

米山俊直『天神祭—大阪の祭礼』, 中央公論新社, 1979.

米山俊直『都市と祭りの人類学』, 河出書房新社, 1986.

米山俊直「地縁再生の装置としての祭礼」『都市問題』90 (8), 13-23, 1999.

## 【註】

i 例え、和崎 (1976)、米山 (1986)、森田 (1980) など。

ii 例え、米山 (1999: 23)、森田 (1990: 42) など。

iii 例え、芦田 (1999: 100) など。

iv 例え、松平 (1990)、内田 (1999) など。

v 元々地理学を専攻してきた内田は、よさこい祭りの調査にあたって民俗学の手法をとり、「地域の民俗文化、生活文化をまるごと生き生きと描くことが、やはり民俗誌の理想」(内田 1999:34)であると述べている。と同時に、「文化財に指定され、付加価値を付けることで、どうにか生き延びる伝統的な祭礼とは違う。財政的な支援が弱くとも、自主的な参加がうながされ、パワーダウンしないのである」(内田 1999:39)と述べている点は、「伝統的」な祭りを正統な調査対象とみなしてきた学界の風潮へのアンチテーゼとも受け取れる。そして、「都市を対象とする民俗学を展開させる研究対象は、その前近代的側面だけではなく、新しく発生した生活文化ではないだろうか」(内田 1999:36)として、民俗学の新しい可能性を示唆している。

vi 上野は、今日の社会学が、社会の「選択縁」化の傾向を重視している理由として、次の点を挙げている。「地縁から生産の共同が失われた後は、地縁の拘束性は著しく弱まり」、「流動性が高く規模の大きな都市のオープン・コミュニティでは、選択の余地のない閉鎖的で排他的な地縁関係を、結ぶ必要も理由もない」(上野 1984:76)。

# The examination of the analysis visual angle in the festival study of the commercial town

: Importance to analyze occupation and life into behind a festival

Akane FUKASAWA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

By this report, I examine the analysis visual angle of the festival study of the commercial town.

For the people of the merchant's family, there is the festival as representation of the daily living consisting of the commercial management and family life.

The study that paid its attention to a festival and the relationship of the community has been performed based on folklore / anthropological participation observation conventionally.

They paid their attention to not only “the tradition nature” of the festival but also a change side.

But the study of these fields is going to often find functions such as “reproduction of the local community” or “the confirmation of the identity” for a festival.

For these studies, there is a study to point out that consideration to the strain relations that a festival is fraught with inherently is insufficient.

Analysis to foresee occupation and the life of the people whom there is behind a festival is in particular necessary when I intend for the festival of people running “Ie”.

In late years new festival groups bound together by “a choiced relationship” increase.

But, in one, the social weak point of the society where “a blood relative” and “shared territorial bonding” relaxed comes to the front.

To analyze the “traditional” festival historically can become the help to grope for the ideal method of the future community.

Keywords : festival, local community, strain relations, “Ie”, occupation and life

